

文藝雑誌『こをろ』のグルッペ

—「精神的、文化的気圏」を生成する「少女」たち—

大 國 眞 希

1. はじめに

『こをろ』は、昭和14年10月に福岡で刊行され、昭和19年4月発行の14号をもって閉じる、20代の学生を中心に発行された文藝同人誌だ。刊行において中心的な役割を果たした矢山哲治自身、「私達の貧しい（ほんとに！）、まだ、俗にいふ、海のものとも山のものとも判らない者達によつてつくられた、まだ雑多な内容」と評している（注1）この雑誌の活動、その熱量や影響力については、近年更なる再評価の気運が高まり、（松原一枝が小説『おまえよ美しくあれと声がする』（1970、集英社）を上梓し、第10回田村俊子賞を受賞、『こをろ』および『こをろ通信』『『こをろ』と私』が言叢社より復刻され（1981）、同人であった阿川弘之、島尾敏雄、那珂太郎、眞鍋呉夫が監修者となり『矢山哲治全集』（1987、未来社）が刊行され、既にその評価は高く定まっていたが、加えて）福岡市文学館企画展「青春の光芒 矢山哲治と文芸雑誌『こをろ』」が2018年11月19日から12月16日まで開催された。

同人雑誌が統廃合されゆくなか、中心人物であった矢山哲治が白玉楼中の人となり、闘病中・待機帰還中と女性を除いて全ての同人が軍務についたと編集後記に書くに至るまで（正味五年間）刊行し続けられた『こをろ』の背後には、書き手としては表に現れない女性たちの存在がある。

杉山武子氏は次のように説明する。

「こをろ」を立ち上げる直前の一九三九年（昭和十四）年八月一日、男女のグループは寿司やキャラメルなど持参して男女分れて新博多駅に集合。出発後に合流して、名島の海岸を走りまわって遊んだ。女性を含めたこの集団を、彼らは「グルッペ」と呼んだ。／男性グループは矢山哲治、吉岡達一、安河内剛、鈴木眞、鳥井平一、佐藤昌康、横倉弘吉など福高の同窓生が集まり、女性グループは廣瀬信子、山崎邦栄など県立福岡女学校同窓生や、私立福岡女学院（ミッション）の人たちだった。（中略）男性グループの中心には矢山がおり、女性グループは山崎邦栄がリーダーシップを取り、自分の通う女学校や、妹の通う福岡女学院の友だちを誘った。彼女たちは「こをろ」が創刊されるとたちまち院外団となり、「こをろ」親衛隊として読者になり、同人たちとのグループ交際を楽しんだ。（中略）「こをろ」創刊時に三十数名の同人を集めた矢山は、さらにそのまわりにグルッペと呼ばれた女学生集団の「こをろ」親衛隊をも集めたことになる。（注2）

また、近藤洋太氏は「こをろ」の同人は、福岡高等女学校及び私立福岡女学校（ミッション）出身の女性たちと、しばしば福岡市近郊の丘陵や海辺に野遊びに出かけた。彼女たちはまた「こをろ友の会」の会員として、精神的にも財政的にも「こをろ」を側面から支えた人たちでもある。こうした集団的男女交際は、昭和十四年夏、矢山の小学校の同窓生であった広瀬信子が山崎邦栄を紹介したことをきっかけにはじまる。「同人雑誌「こをろ」は戦時下に刊行された「こをろ」十四冊だけでなく、「こをろ友の会」の女性会員たちを含めたかたちで検討されなければ、その本来の意義を見失うことになりはしないかと思う」と正鵠を得た指摘をしている（注3）。

この野遊びの経験を吉岡達一はのちに「友達」と題して小説化している（注4）。この題名については少し注釈を要するかもしれない。『こをろ』は昭和16年3月に発刊された6号を前に一度、同人を解散した。そして、新たに刊行された6号から、同人を同人と呼ばず、友達と呼ぶことを宣言した。矢山哲治は「解散提案者の動機その他について」のなかで、「こをろ創刊の日に

一応帰りたい。創刊の首唱者である私は、私達だけの精神的、文化的気圏をつくりたかつた」と書いている(注5)。「友達」という名称は、矢山が同時期に刊行した詩集『友達』と連動しており、『こをろ』6号には「矢山哲治詩集友達によせて」という特集が組まれ、矢山が「友達」という文を、友達・眞鍋呉夫が「詩集「友達」について」を、そして鳥井平一が「詩集「友達」によせて」をそれぞれ寄稿している。そのなかで眞鍋は「「同人」から「友達」へと、たゞよびなが変つたゞけであるといふならば、何を祝福し、何を祝福されることがあらう。私は、こゝにはつきりと、「友達」といふことが、私達の生成を示すものであることを云つて置かう。／いま、詩集「友達」は無数の「友達」の腕に抱かれ、「友達」は詩集「友達」の心を心として、成育しようとしてゐる。「友達」は、各自が各自の信仰であり、親衛隊である。」と書いている。吉岡達一がグルッペの野遊びの経験を反映させた小説に「友達」と冠したことは、とりもなおさず「友達」には、執筆陣だけではなく、グルッペたちも含められる証左とならう。書き手としては表舞台に立つことがなかった女性たちもまた「精神的、文化的気圏」を生成する大切な「友達」であった。

矢山哲治の詩集「友達」はドイツ語で「Die Kameraden」を充てる。この語は英語の“friend”にあたる“Freund”よりも、(学生を意味すると同時に)「連帯」や「戦争」を強く意識させる。昭和21年に刊行された旧制福高クラス雑誌「青青」の編集後記に(この同人には当然旧「こをろ」のメンバーが含まれている)「僕たちは、どの様な時代の波のなかにあつても、「青々」といふ美しい言葉につながれたカメラデーデンシャフトを信じたい。そして、それを信ずる限り、僕達は、もはや、何物も恐れない」と書いてみせたように、旧制福高の校風に連なり、かつ時代にも強く共振しうる言葉の選択であった。実際、その説明として眞鍋呉夫は「同伴者としての意味、戦友としての意味」を、「ルーマニア日記」(カロッサ)の行軍部分を引用しながら説明を試みている(注6)。

しかし、一方で、「こをろ」の女性会員たちが「こをろ友の会」を形成し

ていたことも事実である。たとえば当時、少女雑誌「少女の友」の愛読者の集まりが「友ちゃん会」と呼ばれ、イベントなどを企画、創作側と読者側との交流がなされていた（注7）ことも思い起こされる。「グルッペ」の女性は、この文化圏にもあったことを忘れてはならないだろう（注8）。「場所を異にして今詩集を手にとる友達に、遠く呼びかけたい」と眞鍋が希った「友達」の意味も、いわゆる旧制福高の校風のみならず、もっと多層性を帯びて生成されていたのではないか。つまり、近藤洋太氏も指摘するとおり、執筆者として登場することのないグルッペに属した女性たちの存在をも検討することにより、「こをろ」の「精神的、文化的気圏」を、より豊かに理解することができるようになるのではないだろうか。本稿では以上のような観点から、「こをろ友の会」の文化の香りの一端を示す手がかりを目指したい。

2. 小説化されるグルッペと私立福岡女学校生制作の慰問帖

吉岡達一のみならず、眞鍋呉夫もまた「二十歳の周囲」や「美しかった日に」のなかで、グルッペの野遊びを小説化している（注9）。「二十歳の周囲」の中では、視点人物「自分」の友人である矢ヶ崎がグルッペと過ごした夏の思い出を私家版の詩集『友達』として編んで、仲間だけに頒つ計画を立て、「自分」がその業務を受け持つ場面が描かれる。周知のように眞鍋は、矢山の詩集『友達』の造本に当たった。「二十歳の周囲」の中に登場する詩集「友達」は、「木版の天馬を刷り込んだ扉の裏には、「美しかった日に」と緑の活字が鮮やかに書き込まれたとあり、実際の矢山哲治の詩集『友達』に酷似している。もちろん、眞鍋呉夫の小説「美しかった日に」の題名はこの扉の裏にあった言葉と響きあっている。余談だが、矢山哲治は檀一雄の『花筐』を愛し、その評論を手掛けているが、眞鍋の小説に描かれるダンスシーンは、『花筐』のオマージュであるように思えてならない。

グルッペの「野遊び」について描く、眞鍋の小説に登場する初子は、のちに妻となる久我正子をモデルにしたと言われている（注10）。その事実を踏

まえると興味深い作品がある。眞鍋の手になる少女小説で、『少女クラブ』（昭和24年3月号）の付録として刊行された、『五月姫（メイ・クイン）』だ。

福岡にあると推定される、ミッション系（キリスト教を感じさせる校風）の、聖クララ学園を舞台に、「五月姫」の行事をめぐる事件が描かれているため、選ばれし「五月姫」が、花が蒔かれるなかを歩き、それ以外の生徒たちはメイポールダンスを踊る場面もある。メイポールダンスは、ヨーロッパで催される May Day（5月祭）に May Queen, Maypole の周囲を踊る伝統儀式であるが、グルッペの中心的なメンバーたちが在籍していたミッション（私立福岡女学校）（注11）でも、1916（大正4）年から行われている学校行事だ。小説では学校の授業の一環としてウォーキングを行う場面があるが、ウォーキングもまた私立福岡女学校において1922（大正11）年ごろから姿勢を正しくして歩くために行われていた。本作は吉屋信子に通じる、典型的な少女小説の枠組みを有する一方で、「美しかった日に」と類似した逸話も挿入され、小説の生成にグルッペの存在が関与していることを想起させる。

また、既出の吉岡達一「友達」には「少女達は、彼女達の間だけに流行つてゐるらしい「なんとこのう」とか「思へば」とか「無意味」とかいふ言葉をしきりに使ふのだつた。それは彼女達の親密さを一層強めてゐるやうだつた。」とあり、眞鍋呉夫「美しかった日に」には「「へっへ、なんとこのうね」／と、利根は何かを頬張つた儘、てれた表情になつて、皆を笑はせた。なんとこのう（なんとなく）とか、いかれた（やられた）とかいふのは、女学校時代から持続した、彼女達仲間の他愛もない流行語であつた。」と書かれており、グルッペの女性たちが有していた文化圏を仄かに垣間見せる。

しかし、執筆者となつて「こをろ」に登場することがなかつたため、直に彼女らの言葉に触れることは叶わない。そこで、迂廻路にはなるが、ミッション（私立福岡女学校）に通っていた生徒たちの手になる慰問帖を手にとって眺めてみたい。

戦時下の1943年につくられたこの慰問帖を、フィリピンで戦死したアメリカ兵の家族が大切に保管しており（注12）、現在は福岡女学院の資料室に展

示されている。

戦時下、少女雑誌の便箋やウツシエなどの付録には慰問用と銘打たれていた。そのことに対応するように、私立福岡女学校（現在の福岡女学院）の生徒たち作成の慰問帖にも松本かつぢの絵が模写されている（図4）ことは先述のとおりだ。



図 1



図 2

また、1943年に陸軍恤兵監修、主婦乃友社編集で刊行された『慰問帖の作り方』には、「旅行日記や勤勞奉仕の模様、また寄宿舎のはりきつた生活、あるいは百貨店で行はれる防空展覧会の類を見てきて、それに順序をつけてうまく並べるとよいでせう。神社で絵葉書を買ってきて貼つたり、押花もよいです」との説明

と共に「むさしの花の押葉」が貼られている「体力錬成行軍記」が示される（28頁）。それに近い形として、女学院の慰問帖では、小さな紅葉した葉が並べて貼られており、「内地の秋をお徳びください」と書き添えられている頁がある（図1）。形式としては、両者は似ているがやや風合いが異なる。

『慰問帖の作り方』には、なぞなぞを書く例が紹介されている。

なぞなぞはいろいろに工夫して面白いものになります。ラヂオの『前線に送る夕べ』にやるなぞなぞ問答のごとく、うんと面白いもの、兵隊さんが思はずふき出してしまふやうな傑作を考へてください。これは家庭の人がめい

めいに出題したわけですが、写真を貼ればもつとよくなります。木の絵を描き、その枝に一つ一つぶら下げておいたりするのも愉快です (31頁)。

福岡女学校の慰問帖にもなぞなぞを含む絵が描かれているが、福岡の言葉を利用したほほえましい内容となっている (図2)。

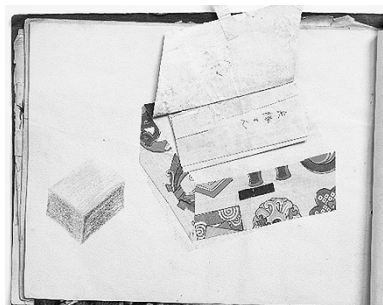
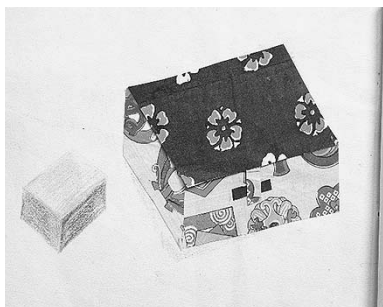


図3



図4

そのほか、『慰問帖の作り方』に「家中で慰問文をお送りするときなど、ちよつと工夫して状差や郵便箱など折紙や千代紙でこしらへて、そこに貼っておくと、一そう趣きが出てまゐります」(67頁)とあるが、女学院の慰問帖には、厚みがある色紙で二次元の箱をつくり、蓋を開けると手紙が書かれている頁がある (図3)。

『慰問帖の作り方』にある「豆本図書館」の頁では、「新聞や雑誌の小さな切抜きを集めて小さな本にとどて、たくさんにまとめます。／女学生の方々にはこんな細かい神経があるから、きつとうまいものができると思ひます」(63頁)と解説されている。これを想起させる頁は女学院の慰問帖にもある。小さな小さな冊子のなかに文字が書き込まれ、いくつか糸で垂らしてある頁 (図4) だ。

『慰問帖の作り方』では、「劇場へのご招待」として、劇場の建物を描き、

左端をめくったらその下に劇場の中が見えるような絵を描く方法を紹介している。これに類似するものとして、女学院の慰問帖には、歌をみんなで合唱している絵の横の部分が扉の形で開くようになっていて、そこに手紙が書かれている頁（図5）も見られる。

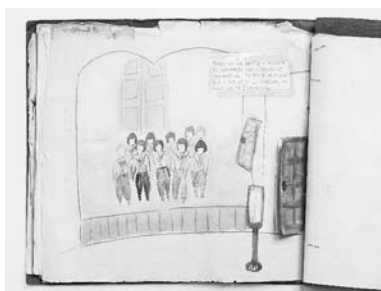


図5-1



図5-2 右下の扉が開いて手紙がある

『慰問帖の作り方』には「凝れば凝るほどよいのは他のどれも同じです。慰問帖に『凝っては思案にあたはず』といふことはまずありません」と書かれており、そこに紹介されているのは飛び出すもの、伸びるもの、めくるもの、切り抜くもの、工作するものたまさに意匠を凝らした頁だ。

女学院の慰問帖は恤兵部の示した作り方に準じながら、仕掛け絵本のような仕上がりになっている。女学院に慰問帖が戻ったことを報じる新聞も「学校生活やキャラクターなどが色鉛筆や水彩、貼り絵で描かれ、扉の絵をめくると手紙が飛び出す仕掛けも。」「『空には美しい星が出ています。兵隊さんは遠い異国の地でどんな風にして眺めていらっしゃるのか——』。色使いや文面から女学生らしい繊細さを感じられる」と評している（注13）。また、同記事は、慰問帖を大切に保管していたフィリップ・オランダー氏が「戦争の苦しみや悲劇を考えずにはいられない、心の琴線に触れるものがある」と感じて、日本に戻そうと決意したとも報じている。福岡女学院に慰問帖を届けたオランダー氏は「歴史的な意味合いを理解してもらえる、帰るべき場所に戻すことができてほっとした」と話していたとも伝える。女学院の慰問帖

が一方通行の直線を描いて消滅することなく、時代を越えて今ここにある意味をあらためて考えなければならぬだろう。

3. 虚空からの呼びかけに答える声

眞鍋呉夫「美しかった日に」の冒頭には次のような箇所がある。

「友達」には文江と安子に贈られた詩も編み込まれてゐて、いはば矢ヶ崎の青春遍歴の記録であつたが、その最後に緑の鮮やかな活字で刷り込まれた、

お前よ 美しくあれ と声がする

といふ文句を、皆はそれぞれ自分自身に呼びかけられた虚空からの声といふ風感じてゐた。詩自体への批判はとも角としても、皆が「友達」の刊行によつて、自分達の青春を鼓舞され、確証された気持になつたのは事実だつた。

自分達はみじめに萎けた時代に生きてゐた。が、自分達はかうした自負を合鍵にして、自分達だけで夢想し形ち^{マツ}づくつた世界の中に、やすやすと出入する事ができた。それは青春だけが成し得る一種の魔術であつた。

物を書いている「こをろ」周辺の女性は少なくとも2人いる。松原一枝と小見山敦子だ。松原一枝は矢山と同じく「九州文学」の同人であり、安河内剛追悼文を「こをろ」7号(1941・6)に、また矢山哲治追悼文を「こをろ」13号(1943・6)に寄稿している。小見山敦子は、「こをろ」9号(1941・6)に小説「雲雀」を寄稿している。

本稿の冒頭で触れた松原一枝の『お前よ美しくあれと声がする』(集英社、1970)は、先に引用した眞鍋が言うところの、虚空の山頂からの呼びかけ声に応えたものであると言えるのではないだろうか。それは山彦^{エコー}ではないため、矢山の声とまったく同一ではもちろんない。そうではないからこそ、

一部が重なり、一部は外れながら多様に世界を形成し得る。

また、矢山哲治は「こをろ」の創刊号に、立原道造の手紙を「詩人の手紙」として巻頭に掲載すると同時に、自分自身も詩「小さい嵐」を寄せた。実存や意味ではなく、創造の気配を伝え、辛うじてその感触が残す玉響から生み出される精神的、文化的気圏を期して。

「小さい嵐」にある「嵐を約束する」ような「あめ色の蝶のかたち」に応えたかのように、小見山敦子は、矢山をモデルにした小説「挽歌」（筆名は秋山まさ子）のなかで

私はあなたに純粋な、真実のいみの立派な詩人を期待してゐるのです。私の叶へられないゆめ（私は女で、又舟乗りでもなく、自由でない——私のゆめ、悲しみの壺ふかく閉じこめられてゐる一匹の疲れ果てた蝶のゆめ——が、どんなに生き生きとしてゐて、自由で、無限で、光に満ちあふれたものであるか、お解りになりますか？

あなたは私のゆめです。私はみすぼらしい一匹の蟲でしかないかも知れないけれど、あなたは私の実現されるゆめでなくてはならないのです。あなたは年老いてもなほ、かなしい詩によつてかなしめる者を慰さめ、はげまし、いつまでも青春を失はない、立派な詩人とならねばならない。

と書いている（注14）。これもまた、戦後において、虚空の声に、エコーではなく、別の人間の肉声が応えた例と考えられる。〈蝶〉の表象として重なりながらも、（別の人間の肉声であるのだから、当然）異なる内実を有しながら羽ばたいている（注15）。それは「こをろ」の執筆陣とそれを支えた「グルッペ」の女性たちが、重なりながらも別の精神性、文化性を持ち、豊かな気圏を形成していたこととどこか通じるのではないだろうか。

二十代の若者たちの手によって戦時下につくられ、発行されつづけた、決して有名ではない、地方の文藝雑誌が、戦後において新たな文学を生み出す「小さな嵐」となる。それを可能にした、換言すれば、彼等が目指そうとし

ていた精神的、文化的な気圏を考えるうえで、表には現れることのない周辺の女性たちがまとっていた雰囲気を理解することは決して無意味ではない。

小説家として立った女性は一握りだ。多くの「グルッペ」の女性たちは小説や随筆などを残すことなく、戦後を生きてゆく。「こをろ」の活動を支えながら、直接的に文章が活字化されることのない、彼女たちの精神や文化の一端に、本稿が少しでも光を当てることができれば幸いである。

注

- 1 矢山哲治「私信—こをろを読んで下さる方に」(『こをろ』6号, 1941・3) 29頁。
- 2 杉山武子『矢山哲治と「こをろ」の時代』(2010, 續文堂出版) 102~104頁。
- 3 近藤洋太『矢山哲治』(1989, 小沢書店) 210~213頁。ちなみに、『こをろ友の会』の会員募集のことは、「こをろ」6号に掲載されており、「こをろこをろ」欄の「私信」にも書きましたやうに、こをろは一人でも多く同じ世代の方々に読んで貰ひ度いこと。それにはこをろは隔月発行を原則とし、店頭販売も多少は行つておりますが、いろいろの点で読んで下さる方々との疎通を欠く事になり易いのです。それで「こをろ友の会」を設けて、読んで下さる方々の名簿を作成し、側面からこをろの生成を援助して戴ければ誠に好都合でもあり、嬉しく存じます」と書かれている。26頁。
- 4 吉岡達一「友達」(『こをろ』11号, 1942・4)。
- 5 矢山哲治「解散提案者の動機その他について」(『こをろ通信』4号, のち『矢山哲治全集』(未来社, 1987) 所収。) 233頁。
- 6 眞鍋呉夫「詩集「友達」について」(『こをろ』6号, 1941・3)。「いまや、お互ひの結びつきの確信と感情が昂められて、かれらの水の性を火に変じ、身を散華して闇を明るくすることを教へるであらう。戦友達は、彼の光を絶やしはしない。」等とも書かれている。18~24頁。
- 7 遠藤寛子『『少女の友』とその時代—編集者の勇氣 内山基』(2004, 本の泉社), 遠藤寛子監修『『少女の友』創刊100周年記念号 明治・大正・昭和ベストセレクション』(実業之日本社, 2009) など。「友の会」は「九州クラブ」も存在し、九州でも「友ちゃん会」が開催されている。今田絵里香氏によれば、「友ちゃん会」は基本的にその地域の読者の何人かが幹事になることになっており、読者側の主導で、編集者や作家、画家を呼び、会の企画・準備・運営にあっていた。そのため、「友ちゃん会」は、編集者や作家、画家が少女たちに訓示をほどこすだけでなく、参加した少女たちのほうでも自己紹介をし、意見を述べ、創作劇などを披露し、フィナーレには全員で「少女の友の歌」

がうたわれるような、読者参加型の親密な集まりであった」（『少女雑誌における「少女ネットワーク」の成立と解体－1931年～1945年の少女雑誌投稿欄分析を中心に－』（『教育社会研究』70集）189頁。

- 8 グルッベたちの後輩にあたるが、昭和18年時に16歳で私立福岡女学校に在籍していた生徒たちの手によって制作された慰問帖が現存している（福岡女学院資料室所蔵）。その手帖には松本かつぢの絵を模写した頁がある（図4参照）。松本かつぢについて遠藤寛子氏は、「内山主筆と『少女の友』をもっともよく理解した作家として吉屋信子をあげたが、ではもっともよくこの二者を理解し、愛した画家とはといえば、松本かつぢ氏をあげるべきだろう」（『『少女の友』とその時代—編集者の勇気 内山基—』（本の泉社、2004 50頁）と紹介している。また、『少女の友』は松本かつぢの「銃後の前線へ——少女の友慰問帖」を掲載している（36巻9号、1943・9）。
- 9 共に眞鍋呉夫『二十歳の周囲』（1949、全国書房）に所収。ちなみに、『月見草』（1949、偕成社）にも後述するような五月祭の場面がある。
- 10 平成22年度福岡市文学館企画展図録『檀と眞鍋』（2010、福岡市文学館）。
- 11 花田俊典「こをろ年表（初稿）」（『文献研究』40号）によると、グルッベには県立福岡高等女学校と私立福岡女学校のそれぞれの同窓生がおり、後者には山崎邦歌、秋根美代子、寺野久子、原田信子、久我正子、田中幸代、井上みゆきらがいた。ちなみに、この年表では秋根の現姓は羽室となっているが、同窓会に確認したところ、葉室。昭和14年本科卒業として、山崎邦歌、秋根美代子、寺野久子、原田信子、久我正子、田中幸代を今回の調査でも確認できた。写真1は当時を伝える写真。
- 12 保管者の理解を深めるため、英訳が付されていた。この英訳がふるって、味があ。例えば、1. 兵隊さん、有難う。2. 秋が行く僕も行かふ 3. ぐんぐん伸びて太ろう天にとゞく迄 4. 風に吹かれて飛んで行かふ 5. 戦地の兵隊さんのところ迄。6. 黄色い小鳥のようにひらひらと 7. 兵隊さん待つて、ね 8. 兵隊さんしつかり 9. ワンワン僕ははりあつてる、という日本語の訳は（2. 4. 5. 6は銀杏の葉の絵の下に書かれた銀杏の葉の語り。3は描かれた木の幹に書かれた木の語り 9は犬の絵の下に書かれた犬の語り）、1. Thank you, soldier. 2. Where autumn goes, I go too. 3. It grows and grows till it reaches the sky. 4. Let us fly about blown by the wind. 5. As far as our soldiers on one battle front. 6. Like little yellow birds. 7. Soldier, we are waiting for you. 8. Soldier, don't lose heart. 9. I say the same thing.（図6）。
- 13 丹村智子「女学生の慰問帳戻る」（『西日本新聞』2016・8・16）。
- 14 秋山まさ子「挽歌」（第二部）（『午前』1巻4号、1946・10）93頁。
- 15 詩魂が触れ合うときの玉響を、息吹を感じさせる蝶の羽ばたき——てふ、といふ——は、立原道造から矢山哲治、そして遠く太宰治を巻き込みながら、三島由紀夫の鼓膜も

文藝雑誌『こをろ』のグループ
—「精神的、文化的気圏」を生成する「少女」たち— (大國)

打つ。但し、立原が矢山を誘いながらもその死によって頓挫した詩誌「午前」の名を負い、眞鍋呉夫が「こをろ再生」の決意を胸に秘した雑誌「午前」に参加している三島由紀夫であるから、蝶の変遷はそう意外なことではないのかもしれない。このことについては別稿を期したい。

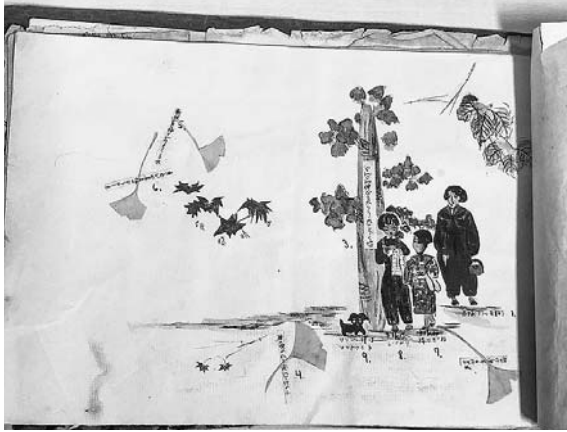


図 6



写真 1 (個人蔵)

【付記】 本稿執筆にあたり、資料をご提供いただいた福岡市立図書館文書課中山千枝子氏、福岡女学院資料室井上美香子氏、福岡女学院大学人文学部田中英資氏に謝意を表する。有難うございます。